キンダイのドイツ語

著者	西嶋 義憲
著者別表示	Nishijima Yoshinori
雑誌名	Laterne
巻	106
号	特集・金沢学会に寄せて
ページ	7-9
発行年	2011-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/00053837

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

が、独文は圧倒的に文学をやるところというイメージが強く、学部のドイツ語学は作文、文章論など運用に関した授業が多かった。私自身もブレヒトの戯曲を卒論のテーマにして、大学院に入ってドイツ語学に転じた時には、何やっているのというような視線で見られることもあった。大瀧敏夫先生の影響も強かったが、言語がもつ機能について徹底的に迫りたいと思ったあげくの転回であった。大瀧先生は、S. J. Schmidt を招いて、テクスト言語学ゼミを開催して、ドイツ語で学問的議論を行うことの意味、時には失敗を覚悟で発言することの勇気を教えていただいた。先生はまた院生をドイツ語授業に連れ出して、教壇に立たせ、ドイツ語教授法を実地訓練していた。松村先生には直接授業で教わることはなかったが、研究室を訪ねては言語学論文の書き方と発表の仕方を伝授していただいた。大瀧先生と松村先生の後押しで、一九八四年秋の金沢大学での独文学会シンポジウムで発表することができ、一歩前に出ることができた。この頃が私の駆け出しの修業時代で、なつかしい青春時代であった。

（広島大学教授）

キンダイのドイツ語

西嶋義憲

金沢大学（通称「キンダイ」）で日本独文学会が開催されるのは、一九五六年、一九八四年についで三回目です。前回の会場は城内キャンパスでした。緑豊かなお城の中で学会が開催されたので印象に残っている方も多いのではないでしょうか。そのお城にもう大学はありません。城内ではタヌキが出没していたようですが、今回の会場はクマが出るかもしれない自然たっぷりの角間（かくま）キャンパスです。実際、角間では「クマ注意」の看板を見かけますし、ときに「クマ警報」も発令されます。自然の中の散策を楽しみたい方は、念のためクマよけの鈴を持ち歩くことをお勧めします。

さて、本稿では、クマのように避けられつつあるキンダイのドイツ語についてお話ししたいと思います。

一九九二年四月の赴任当時、金沢大学教養部に所属するドイツ語教員は私を含めて十二名でした。本来の

定員は十一名ですが、十八歳人口のピークによる学生定員臨時増募に合わせ、当時の主任最上宏信先生の後任先取り人事が行なわれた結果、二年間だけ十二名体制となりました。この人数は、教養部では英語教員数に匹敵する勢力です（教養部以外のドイツ語教員には文学部独文科に四名と、その他に外国人講師が一名配置されていました）。その教養部は一九九六年三月に廃止されますが、私は教養部の人事で採用された最後のドイツ語教員です。教養部廃止に伴い、旧教養部所属の語学担当教員は複数の学部やセンターに分属させられました。

学部などに分属すると、後任人事では当該部局の論理が優先されます。後任に当該外国語の教授可能な教員を採用するという分属の際の「縛り」がいつの間にか無視され、分属先ではドイツ語を担当できる教員の後任が見込めなくなりました。その結果、現在、本学でドイツ語を担当する専任教員は旧教養部系の法学類・経済学類・外国語教育研究センター所属の三名、旧文学部系の人文学類・国際学類所属の四名、それに外国人講師一名を加えた計八名です。旧文学部系の教員数に変化はありませんが、旧教養部系は往時の四分の一、たったの三名です。そして、この三名も、以下に見るように需要との関連で、おそらく後任をとることはできないでしょう。

このような教員数の変化はドイツ語受講者数の減少と連動しています。その推移を二〇〇五年度から今年度までの初習言語としてのドイツ語履修登録者数（受講者の延べ人数）と履修率の変化で確認してみましょう（各年度とも前期のみ集計）。

二〇〇五年度（一七三四名、四〇・七％）、二〇〇六年度（一〇〇一名、三九・〇％）、二〇〇七年度（八四四名、三六・九％）、二〇〇八年度（七三三名、三七・七％）、二〇〇九年度（六八五名、三七・〇％）、二〇一〇年度（五八一名、三二・四％）、二〇一一年度（五一四名、三〇・三％）。

受講者数は年々着実に（！）減少しています。ここ数年間で一七〇〇名から五〇〇名へと約三分の一にまで落ち込んでいます。とりわけ二〇〇五年度から二〇〇六年度にかけて受講者が激減していますが、これは、理・工・薬・医学という理系学部で初習言語の履

修を必修でなくしたからです。必修でなければ、今時、新たに外国語を履修するような殊勝な学生はいません。現在、初習外国語を選択必修としているのは、文系の旧文・法・経済・教育学部由来の人文・国際・法・経済・地域創造および学校教育学類（文系コース）のみです。

ドイツ語の履修率についても、四〇％から三〇％まで一〇ポイント下落しています。金沢大学で受講可能な初習言語は、ドイツ語の他に、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語、ギリシア語、ラテン語、スペイン語があります。今年度の各言語を履修率の高い順に並べると、中国語三五・三％、ドイツ語三〇・三％、朝鮮語一一・八％、フランス語一一・七％、スペイン語五・九％、ロシア語三・五％、ラテン語一・一％、ギリシア語〇・五％、となります。中国語に一位の座を譲っていますが、それでもまだ二位につけています。

一クラスの平均受講者数ですが、二〇〇五年度は専任十三名・非常勤講師一四名の計二七名で五八コマ開講、初習言語のドイツ語受講者一七三四名をまかなっていたので、一クラス平均二九・九名です。語学のクラスとしては若干多めです。ところが、今年度はその半数、専任八名・非常勤講師六名の計十四名体制で二八コマを開講、初習ドイツ語受講者五一四名に対応しています。一クラス平均一八・四名です。一クラス二〇名以下というのは語学教育では理想に近い人数です。キンダイにおける英語以外の外国語学習の軽視とドイツ語選択の低迷により、ドイツ語教育では図らずも少人数クラスが実現し、結果として質の高い授業を提供できる枠組みが整いつつあるわけです。ただし、それを試みる前に、需要との兼ね合いでドイツ語開講コマ数が減らされてしまい、実現できなくなるかもしれませんが。

（金沢大学教授）

日本独文学会・二〇一一年秋季研究発表会

期日　十月十五日（土）・十六日（日）

会場　金沢大学　角間キャンパス

「自然科学本館」

＊金沢駅東口バスターミナル・6番乗り場発

91・93・94・97「金沢大学」行き。「自然研前」下車。